

(1) 秀吉能の稽古する

秀吉は無聊に苦んでいる時、能師藤松新九郎が年頭祝儀に來てから、能の稽古を始め、更に、今春八郎、親世左近を呼び寄せ、その後、能大会を盛大に開きました。

(2) 舟遊び

名護屋湾内で、明の使を慰安するための舟遊びをやりましたが、数百の大船に各諸候の紋所のついた幕を張らせ、旗、指物を飾り立てさせ、乗組の水夫等にも歌や踊りをやらせました。

秀吉は華美好みであり、この日特に若々しく遊び、黄金の金具の長刀や、虎の尾をか、どた棒や、水天三百人には、赤木綿の羽織を着せ、華やかな酒宴を開らかせたそうです。

(3) 道化遊び

明の使が帰ると、秀吉は諸將の慰勞会を催しました。文禄三年の夏広い瓜畑を作らせ、熟した頃を見計つて俄か作りの商店や旅館の模擬店を設け余興を演じました。

○秀吉は柿色の帷子かたびらを着、わらの履みのを当て、黒頭巾に、菅笠を肩にかけ「味よしの瓜、瓜召され候」と売り歩く、甚く似合つたそうです。

○徳川家康は、あじかあじかが買われし、あじか買われしと呼んで歩きました。ものか「あじか買われし、あじか買われし」と呼んで歩きました。

○前田利家は、喜野ひじりの琴で買ひ取るを請にかけ「宿う宿う」と書を長く引いて、いかに借り損ねた声たつたそうです。

○蒲生氏郷は茶売りになつて秀吉に極上の茶をすゝめ、代金を強くねたりしました。

○織田有楽斎は旅僧になつて秀吉に瓜をねたり。

○前田玄以は丸丘尼となり、その格好が、背は高く肥え太つた比丘尼でおかしかつたそうです。

芝居と云う言葉のまじり

秀吉が陣中で山三郎天婦の物まね等の上手な者を呼び、皆に鬼おた時、諸將には芝居の上に乗物を敷き、小着等は芝居の上で見せたので、芝居と云う言葉はこゝから出たといわれます。

名古屋帯のこと

名護屋陣中には若い兵隊が沢山いたので、慰安所の必要があり、慰安婦が沢山入り込んで表ました。その女達は皆、房の付いた簡単な帯を締めていたそうで、これを名護屋帯と云い、何時しか名古屋帯となつて、名古屋にお株まどられました。

公園上段の大砲

正保三年唐津城主寺沢氏二代兵庫頭堅高の時、高島と鹿島の中間に黒船が表ました。堅高は大いに驚き筑前黒田藩にも通知して、両藩の舟數百隻で、十重二十重に取巻き、遂には柴を積んだ舟に火をつけ、風上から流すと、黒船に燃え移り、黒船の火薬庫が爆発して、海底の藻屑となりました。その後両藩から海士をいれて、唐津藩に八挺、黒田藩に六挺の大砲の筒を引き上げました。その一つが公園上段にあるものと云われますが、何処の船であつたか今だに判りません。

島原の乱と唐津

寺沢志摩守は關ヶ原の戦いの時、秀吉に対する忠義は充分感じつゝ、も、天野源右衛門(安田作兵衛の妾名)に謀つた所、「戦國は買ける方につけば、自分のように惨めになります」と云